

日露戦争・・・ルーズベルト大統領を日本びいきにした金子堅太郎

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

明治三十七(1904年)二月四日夕、日露戦争の開戦を決定した御前会議を終えた伊藤博文(当時・枢密院議長)は、官邸に帰ると、すぐ電話で腹心の金子堅太郎(前農商務大臣、貴族院議員)を呼んだ。

伊藤は「ついに開戦が決まった。戦争は何年続くかわからない。私も鉄砲かついでロシア兵と戦う覚悟だ。君は直ちにアメリカにとび、親友のルーズベルト大統領に和平調停に乗り出すよう説得してもらいたい」と告げた。

金子はこの時51歳。



旧福岡藩士で明治4年、岩倉遣外使節団で渡米し、11年にハーバード大学法科大学を卒業、セオドア・ルーズベルト米大統領(在任1901—1909)とは同窓生で、以来二十数年、交友を深めていた仲であった。電話王・ベルとも友人で、日本きってのアメリカ通であった。

「米国の友好的な対日世論を形成せよ」-

の密命を帯びた金子は3月26日、ホワイトハウスに大統領を訪ねた。

数十人の客が待っていたが、大統領は自ら廊下を走って出てきて「君はなぜ早く来なかったか。僕は待っていたのに」と肩を抱きあって大喜びし、執務室へ招き入れた。

開口一番、「今回の戦争で米国民は日本に対して満腔の同情を寄せている。

軍事力を比較研究した結果、必ず日本勝が」と大統領が断言したのには金子の方が驚いた。以後、金子はハーバード人脈をフルに活用して、全米を回って世論工作、外

債募集にと獅子奮迅の活躍が見せる。



ルーズベルト大統領も『日本の最良の友！』として努力することを金子に約束した。

全米での日露戦争への関心は高く、金子は政治家、財界人、弁護士、大学人らのパーティーなどに引っ張りだこで、講演依頼が殺到する。

英語スピーチの達人の金子は大聴衆を前に日本軍の強さ、武士道精神を説明して感銘をあたえ、日本びいきを増やしていった。

一方、ロシア側も巧妙なPR戦を展開、米紙に「日本はノミ、ロシアは親指だ。二、三ヵ月でひとひねりにつぶす」と豪語するなど、激しい外交戦の火花を散らせた。

戦争は連戦連勝で日本側に有利に展開した。ルーズベルト大統領はまるで日本の参謀役のように軍事戦術、外交面で金子にアドバイスを寄せた。大統領と金子の友情、親密さを示すエピソードは多い。奉天会戦の時、大統領から金子に会談したいとの手紙があり、日本の勝利を祝い最後に『万才！！』と日本語で大書していた。

日本海海戦の前、熊狩りハンティングに行った大統領は大熊など5頭を射止めたが、「ロシア(大熊)に勝つ、これは吉兆だ」と2人は手を取り合って喜び、そのうち1頭の毛皮は明治天皇に献上した。

金子は友人として大統領の私邸に何度も招かれ、大統領自身からベッドメイキングやトイレの案内までしてもらった。

しかし、“勝った、勝った”の日露戦争も三十八年三月十日、奉天での勝利までが限界。

弾薬も尽き果てて、兵隊も金もなく、戦争継続はもはや困難な状況となった。一方、ロシアは強大な兵力、武器を温存、これ以上戦えば日本はひとたまりもない。

参謀総長・山県有朋は絶対絶命のピンチを桂首相へ報告し、ル大統領の和平調停の望みを託すことになった。大統領はここぞと腰を上げて仲介、ポーツマス会談となった。

金子には大統領から逐一情報が入り、フリーパスの大統領の私邸に何度も足を運んで、決裂寸前の講和条約を何とか最後にもまとめ上げた。金子の働きがなかったら、日本はどうなっていたことか。

日露戦争、講和外交の影の殊勲者は金子なのである。
結局、金子の広報外交は大統領との直接の会見や晩餐会、私邸への招待など25回にも及び、高官、VIP との会談、晩餐会、午餐会など60回、各所での日露戦争、日本の立場の演説、スピーチは50回、ニューヨークタイムズなど新聞への寄稿は5回など世論工作は大成功を収めた。

大統領と親友であった幸運と見事にその人脈を生かして外交に成功したケースは近代史にも数少ない。

昭和十七(1942)年五月、金子は八九歳でなくなったが、太平洋戦争中なのに『ニューヨーク・タイムズ』は異例の長文の追悼記事を掲載、「ルーズベルト大統領の友人、日米間の友好を説いた平和の唱道者」として最大の賛辞を呈した。

(禁転載)